

イチョウ . . .



初夏の訪れとともに、いちょう通りが芽吹きの子節を迎えました。そして、ひっそりと目立たないように若葉の影に隠れてイチョウの花も咲いています。雄花は淡黄色で短い穂状となり、雌花は緑色の柄に2個の胚珠をつけています。

雌雄異株で、当然、銀杏の実は雌株にのみなります。雌雄の区別は、葉の形がスカート状なら雌株で、割れてズボン状になっていれば雄株だと長く信じてきましたが、全くの俗説だと聞き、がっかりしたことを覚えています。それから、東京都の緑色のマークは、イニシャルの「T」をかたどったもので、イチョウの葉だと勘違いしている人が多いのですが、間違いです。

大変ポピュラーな樹木ですが、知られざるドラマも数多くあります。

イチョウの全盛期は1億5000年あまり前のことで、つまり、巨大恐竜の時代です。その頃は17属あったと言われていたのですが、氷河期にほとんど滅亡し、中国でただ1種だけが生きのびました。こうした経緯が、「生きた化石」と称される所以です。それから、原始的な樹種のため、特異な性質が多くあることも触れておかななくてはなりません。

1つが、幹の太い枝のつけ根辺りに円錐形の突起（気根）を生じ、そこから澱粉を含んだ乳が出ることです。秩父ハイキングコースでも有名な高山不動尊の大イチョウは見事で、子育てや母乳への祈願の対象となっているのもうなずけます。

もう1つは、自ら動くことができる精子をもつことです。雄花の花粉が風に乗って雌花につくと、花粉が発芽し、やがて2個の精虫を形成します。さらに驚くことには、それから半年後の9月ごろにやっと受精が行われます。この精子の発見は日本人によってなされ、その標本が小石川植物園に育っています。

イチョウの学名は「Ginkgo biloba L.」ですが、「ginkgo」は「ginkyo（ギンキョウ／銀杏）」の「y」が、筆記体では「g」と区別しにくく誤認されたからだと言われています。

それから、イチョウのことを鴨脚（オウキヤク）と言うことがあります。これは葉の形がカモ（鴨）の足に似ていることにちなんでいます。和名のイチョウの語源についても、鴨脚の中国音（イーチャオ）から転じたものという説が有力です。「公孫樹」の方は、孫の代になって実をつけるという、樹木の性質から来たものです。